

## デカートの「規則論」に現はれたる

## 批判論的思想（完結）

朝永三十郎

## 六

デカートの規則論の出発點に於て可なり強く現はれて居る批判論的思想の徹底を妨げた最主要な原因は、プラトーンの影響の結果と信ぜらるゝ、而して後に彼れの哲學體系の前景を占領するやうになつた二元論的形而上學、及び之と密接に結付いた認識の心理説である。此形而上學説と心理説とは規則論の隨處に隱見して彼れをば其本來の批判論的フライゲ・ス・デル・メンツの設問と其解答の方針とを逸脱するべく誘引して居るが、其れが最も表面に現はれて明説されて居るのは、規則第十二の條である。

此處でデカートは、吾々が認識するに當て用ゐ得る能力(facultas)には悟性(intellectus)、想像(imaginatio, phantasia)、記憶(memoria)、感官(sensus)の四者があるとして、其四能力の本性

及び關係をば下の様に説いて居る。

凡ての外感官は吾々が之を使用する場合には或活動即ち運動によつて之を其對象に向けるといふ點より言へば能動的であるが併し肉體の一部である限り、恰かも蠟が印章よりして其形象を受ける様に、受動的に外物の影響を受ける。此蠟對印章との比較は決して唯の比論でなく文字通りに取られねばならぬ。(デカールは此處に既に、凡ての感性的性質は客觀的には物質の運動であつて、其れが感官に對する直接接觸に依て凡ての他の感性的性質の知覺は起るといふことを暗に認めて居る。) 外感官が斯くして受取つた此形象は、共通感官 *sensus communis* と名づけらるべき中樞機關に傳達される。而して此共通感官は又た等しく印章が蠟に働くやうに、想像に働き、其形象をば之に印する。此想像も亦肉體の一部として、腦髓内にあつて、其種々の部分は別々の種々の形象を受取ることが出来、且つ其印象を長時間保留することが出来る。これが即ち記憶に外ならぬ。此想像は其本據たる腦髓より起る神經を通じて、恰かも外感官が共通感官に働くが如く種々の運動を種々の肉體の部分に傳へる。是等は凡て純粹に肉體的作用であつて、凡て動物の運動及び理性の助を待たざる人間の運動は此の如き徑路を履んで行はれる。是等の作用に於ては眞に對象

の認識と稱せらるべしものはない、眞に對象の認識と呼ぶべき作用を營むものは肉體的なる想像でなくして、純精神的の力であり、而して此力は、全然肉體を離れたものである。即ち此處に既に後期に至てデカールト哲學の主要特徴を形造つた二元論機械的生理説、動物即機械説等が現はれて居る。(S.56—59.)

此認識の力は時には想像の助に依て共通感官より來るところの形象を受取ることもあり、時には記憶が保留する形象に向ふこともあり、時には又た想像をして共通感官より來る一切の形象を拒絶せしむるほど一時強く之を獨占するところの新觀念を構成することもあり、最後に此形象をば肉體の能動力に傳へて運動を起さしむることもある。併し其れ等は決して別の力でなくして飽くまでも同一の力である。斯くて同一の力は其れが關係する肉體的機關の如何に依て意識作用としての感覺、記憶、想像等となつて働き、而して其れが全然肉體的機關と關係なく純粹に獨立に働く時には、純粹、悟性、*intellectus purus* である。(S.59—60)

## 十一

デカールトは認識に關與する諸能力の本性及關係を右の様に説いて、更に其認識の

對象に就て説き、彼れが其方法の一重要件とした「枚擧」enumerationに依つて一切の事物を分類し、而して純粹悟性の對象としての確實の認識の如何なるものでなければならぬかを考査して、此書を一貫した、正確な認識は唯自明的な直觀と之に基いた演繹とに依て得らるゝといふ趣意を詳述せんとして居る。(S.61—68.)

デカルトに依れば一切の事物は、吾々の認識に關係して、「單純物性」と其れの結合とに分つことが出来る。單純物性(einfache Naturen, naturae simplices)は「其れの認識が完全に明透判明 perspicua et distinctaにして其れ以上吾々の精神に依て更に判明に認識されるものに分析され得ざる」要素をいふ(S.62)。即ち吾々の認識上其れ以上に分析することの出来ない、其れ以上定義することの出来ない表象を與ふるところの性をいふのである。此處に吾々の認識に關して、若くは吾々の認識上といふは、物の存在上より區別する爲めである。例へば今一定の延長と形狀とを有する或物體があるとすれば、其れの存在上より言へば此物體は其儘單一、單純であつて、吾々は之を物質、延長、形狀なる獨立の三物性が集まつて成るといふことは出来ないが、併し認識上に於ては吾々は此三者を別々に離して考へて、其れが同一の主體に同時に結付いて存すると判斷するのである。單純物性は、(一)純知的なもの、(二)純物質的なもの、(三)兩者を兼ね

たものゝ三種に分れる。第一は悟性が毫も物體的心像の助を借らずして認識し得るもの、例へば疑ひ、無知、執意といふが如きものである。第二は吾々が單に物體にのみ存するとして認識するもの、例へば形、延長、運動等は之れに屬する。第三は例へば存在、繼續等といふが如き、吾々が物體及び精神の双方に歸することを得るものである。尙ほ此種に屬するとして擧ぐべきは他の單純物性を結付ける爲めに用ゐらるゝ連鎖とも言はるべき、而して其の明證エキデンスに基いて推理が行はるゝところの概念である。例へば、二量が共に第三量に等しければ其れは又た互に相等し、又は、二量が第三量に等しからざれば其れは又た互に相等しからずといふが如きものである。

是等の物性は直觀的に確知せらるゝもの、其自身に依て知らるゝ「*per se notat*」ものであつて、決して誤謬を含まず、誤謬は吾々が之を結付けて考ふる時に初めて起る。但し單純物性の結合には、(一)必然的、(二)偶然的の二種の別がある。一の概念が他の概念と不明瞭な仕方では不可離的に結付いて吾々が其れを離れたものとして判断すれば其の何れかをも判明に考へることが出來ぬ場合に其結合を必然的といふ。形をば延長より離して、或は運動をば持續又は時間より離して判断せんとすれば吾々は判明に考ふることは出來ぬ。其故に形は延長と、運動は時間と必然的に結付いて居

る。七は三と四とを不明瞭な仕方で其中に含めることなくしては判明に考へることは出来ぬ。其故に「 $\infty + \infty = \infty$ 」は必然的結合である。尙ほ斯の如き必然的結合は感覺的對象以外にも存する。例へばソークラテースが予は一切を疑ふといふ時に彼れは少くとも彼れが疑ふといふことを知るといふこと、又た彼れは或事が眞又は偽であり得るといふことを許すといふことが必然的に續く。是等の事は凡て疑ひといふ物性と必然的に結付いて居るのである。

之に反して物性の結合が不可離的でない場合は其結合を偶然的といふ。例へば物體は生命を有すといひ、人は衣服を着るといふが如きは其れである。但し必然的結合でありながら其必然的關係が知られざるが爲め皮想的には偶然的と見られるものがある。例へば「予は在り、其故に神は在り」といひ、「予は思惟(意識)す、其故に物體とは別なる精神を有す」といふ命題の如き其れであるが、斯の如き普通注意されざる必然的結合を見出すといふことが學問の要務の一である。

吾々が知り得る一切は單純物性と其れの結合との外に出ることは出来ず、而して純粹悟性の對象たる確實の認識は單純物性と其必然的關係とのみに限らるゝ。前者は直觀に與へられ、後者は演繹に依て發見せらるゝ。斯くてデカールは吾々が正

確なる認識に進み得べき道は唯單純物性の自明的直觀と其れの必然的演繹との二つあるのみと結論した。

(一)(二)是等の例は寧ろ後の叙説の材料として興味があると思つたから加へて置いた。(一)は「規則論」と後期の思想と間に存する關心の相違を示す材料として。デカールトは知らるゝ如く「方法叙説」、「冥想録」及び「哲學原理」に於ても、此處と同様疑ひ其者がやがて確實性に導く、或は寧ろ其中に之を包含すると説いて居るが、併し其適用の仕方は前後に興味ある相違がある。此處では疑ひ其者がやがて眞理の存在を示すことに依て認識批判に導き得るといふ様に活用されて居るが、後の著書に於ては其れか疑ふ者としての我の存在を示すことに依て形而上學に導いて居る。(二)は、後期に於て形而上學の重要々案となつた思想が「規則論」では唯の引例や説明材料として用ゐられて居るといふことの一例として。(九)と對照せよ。

## 八

純粹悟性の對象に關する此「規則第十二」の所説は前に述べた様に「規則第三」の條下に於ける確實なる認識は直觀と演繹とのみによるといふことの詳説として企圖されたものであつて、而して双方の趣旨は又た大體合致し得るのであるが、併し前者は前述の心理説を背景として居る爲めに屢後者を裏切るといふ結果を生じて居る。

後者に於ては直觀は純粹なる精神の表象又は唯々理性の光明のみより起る純粹なる精神の表象であると定義され而して特に變化常なき感官の所示や不判明なる想像の心像に基く誤り易き判斷でなくしてと斷はつてある(S13)とて依て見れば其れは感官や想像の助を借らぬといふことが重要々件となつて居る。然るに前者に於てデカールが單純物性中の二種として純物質的のもの及び知的并に物質的のものを擧げて居ることは既説の如くであるが、更に是等の認識に於ては悟性は他の肉體的機關と關係して成立つ機能の力を借らねばならぬことを認めたる。悟性が毫も物體的若くは物體に類似する要素を含まざる事物を對象とする場合には、感官、想像、記憶等の協力を受くる要はないが、併し物體界に關して何者かを認識せんとする場合には其れの出來る丈け判明なる表象を形造らねばならぬ而して其れが爲めには想像の助を借るを要し、而して想像は其印象を外感官を通じて受動的に外的對象の感觸より受けるのであるから、又た感官の力に訴へねばならぬ(S60-61)。斯くてデカールが反覆重説した認識に於ける悟性の獨立性、精神の純粹性は明かに不徹底に了つて居ると言はねばならぬ。

或はデカールの所謂獨立や純粹は心理的起原の問題とは全然沒交渉である、デカ



トトが感官や想像の力を借りて成立つとした作用の或者をもデカールトは純粹悟性の作用中に數へるのであると解することも出来る。現にデカールトの所説中にも此の如き見方に對する材料が含まれて居る。デカールトに依れば、悟性は其れが經驗の助を借る場合と雖も、明確に、*Præcise* 直觀される對象のみに限る間は、決して其經驗に依て欺かれることはない *(De Cog.)*。尙ほ又精神の直觀は單に單純物性と其必然的結合との認識のみに限られず、悟性が「明確に」自己若くは想像の内にあると經驗するところのものをも含む *(De Cog.)* と説いて居る。而して是等をば「規則第十四」に於ける、光明の度、聲音の強さといふが如き感性的性質は明確に規定することは出来ないが、純粹延長は之に反して等しく想像の對象でありながら確實に規定され得るといふ考と結付くれば、カントの純粹直觀の様な考となつて、其所謂「純粹」の概念は心理的起原の問題より離れて一層精鍊された「アプリアオリ」の概念となることが出来ると言へる。但しデカールトの思想は斯る發展の可能を有しながら、其れは現實とならず、却て其二元論的形而上學及び之と結付いた心理説に累せられて、後期の體系に於ては此純粹延長は形而上學化されて、純粹延長は明晰判明に思惟さるが故に先天的であると考へらるゝ代りに同様の理由に依て客觀的實在と考へられ、而して其「純粹」の概念も亦た

一層心理學的、或は更に一步進んで神が悟性に植付けたといふ様に説かれて形而上學的基礎の上に解せらるゝに至つたのである。

## 九

要するに、デカールは其出發點に於ては純粹の批判論的設問を以て出發し、而して其解答も亦批判論的の方向を取つて居り、認識が對象を可能ならしむるとして居るが、併し之と並んで一切の認識に先つて存し、認識に由て初めて把捉さるべき對象を素朴的に認めて居る爲めに、此批判論的思想は初めよりして時々統一が破られて居り、而して其方法觀の論述が漸次精細に進むに隨ひ其具體的の説明の材料として用ゐられた此獨斷的思想が次第に前景を占め來つて其不徹底を一層明かに暴露するに至つたと見られ得る様である。但し茲に注意すべきは、デカールの此形而上學及び之と密接に結付いた心理説は、「規則論」に於ては其れが特に詳説さるゝ場合に於ても尙ほ常に方法論々述の方便としての假説の形を以て説かれて居るといふことである。其心理説を述べるに當つては、讀者は若し好まぬならば必ずしも事實が其通りになつて居ると信ずる必要はない、併したとへ其れは其自身眞理に非ずとするも

眞理を明かにすることを助くるならば之を豫想するも差支はない、例へば幾何學は分量に關して物理學とは全然異なつた或豫想をなして居るが、併し其れは毫も其の證明の力を弱くしない様なものであると説き(256)更に物性の分析枚舉に當ても亦其れは「恐く凡ての人に取て疑を容るゝ餘地なきほど確定したことゝは思はれぬであらう、併し天文學者が其現象を記述する爲に想像的に設けた圓だけの價値が認めらるれば充分である」と説いて居る(261)。方法の根本法則は此形而上學及び心理學の眞偽とは全く没交渉である。併しデカールは「規則論」に於ても既に此假説は充分證明され得るものと信じて居た。現に彼が其心理説の叙説に入るに當て、其の根據を説かぬのは唯其餘裕が無いからだとし居る(256)に依て見ても、其根據の存在は信じて居たといふことが明かである。而して彼は尙ほ「規則第四」の結末(258)に於て、單に方法論及び普遍的數學への其れの適用のみを以て満足せず更に「より高き學」に向ふ志を有する旨を自白して居るが、其より高き學は即ち彼れが此書に於ては假説的に説いた、大體に於て後期の思想と一致する形而上學説であると察するとは難くはない。彼が今之に立入らなかつたのは、後日更に堅實なる根據を以て之を證明せんとする願望があつたのと、他は教會神學の攻撃を避け得る様充分の用意をなす必

要を感じた結果であると解せられる。此事は後期の主著に於て彼れが如何に教會神學との衝突を避けんが爲めに細心工風せしかを見れば充分了解出来ると思ふ。其故に、後期に至て「規則論」に於ては單に背景に働いて居た其本來の傾向と或外的事情とが結付いた結果デカートの自然科學的及び形而上學的關心が次第に有力となるに連れて、此假説は彼れが正確なる根據と信ずるものゝ上に立つて其體系の主要部を形造るに至り、而して之に伴つて彼をして「規則論」に於てよりも更に甚だしく批判論立場を逸脱せしむるに至つたやうに思はるゝ。

## +

更にデカートをして當初の批判的立場を逸脱せしむるに關與した他の原因がある。デカートは前に述べたやうに其出發點に於ては認識の根本概念及根本命題の體系を組織するとの必要を感じて居た。或は少くとも彼れの最初の立場は之を要求して居る。而して此體系の組織は其自身認識である以上、其の認識の理想概念に合致して、一定の悟性の最高原理より出發して嚴密なる演繹によつて、直接に經驗に適用さるべき、或は寧ろ根柢ある認識としての經驗を可能ならしむるところの諸原

理を導出すといふ形のものでなければならぬ。然るにデカルトは他方に於ては是等の根本概念及根本命題は凡て其自身に依て知らるゝものであつて、定義するとも演繹することも不可能であり、又た不必要であるとした。従つて公理的な要求を以て現はるゝ真理の確實性の標準は唯「明晰判明」といふのみで充分であり、更に進んで其根柢を研究することは全然無用である。「規則論」に存する此真理の標準に關する思想は其體系に於ては次第に重要な役目を演ずる様になり、其時其時の要求に應じて多くの公理的命題を救護する武器に利用され、彼れの哲學の獨斷的傾向を助長する様になつた。斯くて「直觀」又は「明晰判明」等の語、若くは「何人も否定せざるべし、何人も然らずと思はざるべし」(nemo negat, nemo eliter putat)、「自然智に依て明白」(vero lumine naturali manifestum)といふが如き簡單なる句が體系の基礎を形造るところの多くの——其或者は、疑問的な——根本命題を造作もなく辯護し去る重寶なる道具となつて居るといふことは、實に後期の主著の重要特徴の一となつたのである。

是に於て、出發點に於ては認識に於て對象を方法的に造出す働を意味すべかりし悟性は、唯永遠に亘つて與へられてある真理を恰かも感性が感性的事物を直觀するが如く切れ々に直觀するところの能力に過ぎざる觀を呈するに至つた。而して

之と共に、然らば悟性は如何にして其れを知り得るか、又此悟性の法則が同時に一切の事物を支配する法則となつて居るのは何に依るかといふ疑問が必然的に起り、而して之に對する解答は全然形而上學的基礎の上に置かれて、是等の法則は萬有の創造者にして支配者たる神が萬有に與へしと共に之を吾々の悟性に植付けたのあるから、吾々は經驗を待たずして唯々自然智のみに依て明晰判明に之を思惟することを得、而して其れは又同時に客觀の對象の眞を寫すのであると説かれ、而して之と共に、一方に於ては神の存在の確實性が明晰判明に認識されたことの確實性の上に基けられ、他方に於ては後者が前者の上に基けられるといふ循環に陥るの已むを得ざるに至つた。

斯くて「規則論」一編は吾々に、デカールが方法問題を中心として居た時期の思想には其主著のみに依て彼れを判斷する場合に考へられるよりは遙か多くの、而して貴重なる批判論的契機を含むといふことを教ふると共に、批判論の順正なる發展と徹底とを妨ぐるものは多くの場合形而上學及心理學の混入と方法的派生の不遂行——或度に於てカント自身も尙陥るを免かれなかつた諸缺點——であるといふことの最適切なる實例を示すのである。(完)